

主 題：再臨の希望

聖書箇所：ヘブル人への手紙 9章28節

どうぞ新約聖書ヘブル9章をお開きください。

私には忘れることのできない礼拝があります。それは中央アジアのカザフスタンでの礼拝です。集まっている数百名の人々の多くは、その信仰ゆえにさまざまな迫害を経験して来られた皆さんです。講壇に立ち、そこに集う兄弟姉妹たちの様子を見てみると、あるみことばが浮かんできました。それがIコリント15：58のみことば「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。」です。彼らを見ていて私がしたかったことは、どんな状況に置かれているかはともかくとして、我々ひとりひとりクリスチャンとして神が下さった希望をしっかりと見上げること、この神様が下さった希望をいつも覚え続けること、そのことを彼らに伝えることただ一つでした。

私たちの国にいて、我々は彼らを経験しているような、またして来たような迫害を受けることは恐らくないでしょう。しかし、世界じゅうを見る時に、今私たちが生きている時代にもイエス・キリストの福音のためにいのちを落としておられる方たちが確実にいます。ひょっとしたら今この瞬間にもだれかが信仰ゆえにいのちを落としている可能性があります。どの時代であろうと、どこにしようも、主は我々クリスチャンにすばらしい希望を下さった。そしてこれまでの歴史を見た時に、またそういう迫害を経験している多くの皆さんを見る時に、彼らが信仰者として前進して行くことができたのは、彼らがこの希望を見据えていたからです。世の中の人々は理解してくれなくても、世の中の人々は自分たちを嘲笑っても、主は必ず私たちの歩みにふさわしい報いを与えてくださる。主イエス・キリストの前に立つ時に、公正な裁判官である方が私たちの信仰者としての歩みにふさわしい報いを与えてくださる。この希望を持って彼らは歩みました、また歩み続けています。ということは、我々信仰者も、たとえ私たちが彼らを経験しているような迫害を経験していなくても、希望を忘れてはならないということは共通していることです。私たちにそういった迫害がなくても、確かに私たちが推し進めて行くのは同じように希望です。

◎ クリスチャンに与えられた希望のリスト

神様はクリスチャンである私たちに大変多くの希望を与えてくださっています。

① 「キリストの再臨」：Iテサロニケ4：16

一つはイエス・キリストの再臨という希望があります。Iテサロニケ4：16に「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。」とあります。十字架で私たちの罪を負って死んでくださったイエス様が三日後にその死からよみがえられ、四十日地上におられた後、天に凱旋された主は再び帰って来られるという約束を私たちはいただいています。私たちはこの方にお会いすると。

② 「よみがえり」：Iテサロニケ4：16、使徒23：6

また同じように私たちは主から、死んでも必ずよみがえるのだと約束されました。よみがえってさばきを受けるためではありません。よみがえって神様からの褒美をいただくためです。よみがえってこの方とともに永遠を過ごすためにです。Iテサロニケ4：16では「それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、」とあります。主イエス・キリストが戻って来られた時に、既に肉体の死を経験していたクリスチャンたちがよみがえる様子が記されています。そこに、死んでも生きるという希望があるのです。主とともに永遠を過ごすという希望です。

③ 「信者の携挙」：Iテサロニケ4：17

三つ目に信者の携挙というのがあります。イエス様が私たちを迎えに来てくださる時に、主は我々をご自身のもとに迎えてくださる。同じIテサロニケ4：17に「生き残っている私たちが、たちまち彼らと一しょに雲の中に一挙に引き上げられ、」、亡くなっていたクリスチャンたちが、その時に生き残っている私たちが一挙にキリストのもとに引き上げられて、イエス様の御顔を拝するという約束がされています。

④ 「主にお会いする」：Iテサロニケ4：17

同じIテサロニケ4：17が「空中で主と会うのです。」と言います。イエス様のもとに引き上げられ、我々はイエス様にお会いし、イエス様の御顔を拝することができる、そんな日が必ず来ると。

⑤ 「栄化」：ピリピ3：21、ガラテヤ5：5

その時に、感謝なことに私たちはこの罪のからだから完全に解放されて栄光のからだをいただきます。もう主を悲しませるようなことがない、罪を犯すことがない、栄光のからだをいただくと。ピリピ3：21にもガラテヤ5：5にもそのことが記されています。

⑥ 「永遠のいのち」：テトス1：2、3：7

そして私たちには永遠のいのちが与えられる。パウロはテトス1：2で「偽ることのない神が、永遠の昔から約束してくださった永遠のいのちの望みに基づくこと」だと、すごいことを教えます。偽ることのない神様がこのような約束を私たちに与えてくださった。どんな約束かというと、私たちは永遠のいのちをいただくだけではなく、それを楽しむのです。神とともに永遠を過ごすのです。

こうして神様が約束された希望を見るだけで、神様が私たちに大変なギフトを下されたことに気づかされます。我々が何かしたからではない。神様はこういったすばらしい祝福を私たちに与えてくださった。こういった希望、この祝福というのは、あなたや私が救いに与った時に神が我々に約束してくださったものです。ペテロはIペテロ3：15で「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人」々と言っています。つまり我々クリスチャンが神様のみことばに従って生きて行こうとする時に、私たちの周りにいる主を知らない、この救いを受け入れておられない皆さんが「あなたはなぜそのような歩むのですか?」、「なぜあなたはそんなふうにいるのですか?」と疑問を持つという話です。彼らは私たちのうちにある希望に気づくのです。彼らは我々が持っている希望を彼らが持っていないことに気づいて、その希望についての説明を求める。その時にちゃんと説明してあげなさいと言うのです。同じ15節に「あなたがたのうちにある希望」とあります。ペテロは、救いに与ったと同時に神がこの希望をあなたに与えてくださった、だから「あなたがたのうちにある」と、もう既に与えられているものであることを教えています。

またパウロも救いに与った者たちがこの希望を神様からいただくということについてテトス2：11-13で教えています。「：11」というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ、まず最初に彼が言うのは救いの話です。救いが備えられ、そして救われた者たちは「：12 私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て」る、つまり罪から離れるという話です。その後、「この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、」、生き方が変わるということです。これまで私たちが歩んでいた罪から離れ、神が喜んでくださることを実践しよう、そういうふう生きて行こうと、新しく変えられる話です。そして最後にこう記されています。13節「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。」と言っています。救われた者たち、つまり罪から離れ、神に喜ばれることをして行こうとする。救われた者たちは、主イエス・キリストにお会いする再臨を待ち望む者になると。まさにこの状態というのは、待ち焦がれている人物が帰って来るのをつま先立ちをして待っている様子です。早く主にお会いしたい、早くイエス様にお会いしたい、そういった様子をこのことばは表しています。こうしてペテロやパウロの証を聞く時に、罪の赦しをいただいた者たち、救いに与った人々には、神様がこの希望を与えてくださり、この希望を持って生きる人へと生まれ変わったと言うことができます。

きょうのテキスト、ヘブル書9章で著者は私たちに同じことを教えています。28節の後半に、「彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」とあります。見ていただきたいのは、「彼を待ち望んでいる人々の救い」なのです。人々、人間の中にいるのです。主イエス・キリストの再臨を待ち望んでいる人々、この人たちの救いのためにイエス様が来られるということがこの28節にも記されています。救いに与った時に、本当の信仰者、クリスチャンとされた時に、その人は主イエス・キリストにお会いしたいという希望を持って生きる人へと生まれ変わったのです。

☆ 「再臨の希望」をもたらした「キリストの救い」ヘブル9：25 - 28

初めにお話ししたように、カザフスタンに行った時に、私は彼らに我々クリスチャンに与えられているそのすばらしい希望をしっかりと見上げて、ぜひ続けて歩んでほしいと伝えたいと思いました。わかったことは、そんなことは伝える必要はないということです。彼らはそのように生きていたのです。このキリストの希望、主にお会いするというすばらしい約束が確かに困難の中にある彼らの支えでした。きょう皆さんと一緒にこの再臨の希望をもたらしたイエス・キリストの救いということについて、このヘブル人への手紙の著者から大切な教えを学んで行きましょう。

彼は私たちに大変な犠牲のもとにこの救いが、この希望が与えられたことを教えてくれます。ヘブル9：25-26「それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所にはいる大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることはなさいません。もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」と。この箇所を読んで、「大祭司」や「いけにえ」、「罪を取り除く」いったことばにお気づきになったと思います。ヘブル書の著者は、アロンに始まり、その後の大祭司たち、イスラエル

の大祭司がもたらす罪の赦しと大祭司イエスがもたらす罪の赦しを比較しています。その上で、キリストによって完成された完全な罪の赦し、人間の祭司ではない、イエス・キリストという大祭司がもたらしたこの救いこそが完全なものであると彼は伝えようとするわけです。

A. 「贖罪の日(ヨム・キップール)」：出エジプト30：10、レビ16：2-30

この9章には、私たち日本人にとっては非常になじみが薄いというか、余り聞きなれないことが続いています。実はここでこの著者は、イスラエルの人々にとって最も大切な日、贖罪の日、大贖罪日とも言われていますが、ヘブライ語で「ヨム・キップール」、「ヨム・キプル」とも言いますが、この日の話をします。少なくともその基本的なことを知っておかないと、ここでこの著者が言わんとすることを理解できないので、大急ぎでこの贖罪の日とはどういう日であり、人々がどういうことをしたのか説明します。

この贖罪の日は最も聖なる日と言われています。出エジプト記30：10に「主に対して最も聖なるもの」として記されています。そして、どのようにしてこの日を迎えるのか、アロンがどのようにして罪の赦しを求めるのかがレビ記16章の中に記されています。レビ記16章を開いてみてください。

① 「罪のためのいけにえとして若い雄牛、また全焼のいけにえとして雄羊を携える」 3節

まず最初に、アロンは——そしてこの後大祭司たちが同じようにして行くわけですが——何をしなければならなかったかという、自分自身と自分の家族、また祭司の罪を赦していただくために、一頭の雄牛、そして、全焼のいけにえのために一頭の雄羊を用意することが準備として必要でした。

② 「からだをきよめた上で、聖なる装束を身につける」 4節

そして、ここではアロンに対する指示として出ていますけれども、二つ目に必要なことはアロン自身、後の大祭司ですが、自分自身の体をきよめた上で「聖なる装束」を身につけなさいと。聖なる儀式を行なうから「聖なる装束」を身につけなければいけなかった。そのことは4節の中に出て来ます。

③ 「イスラエル会衆の罪のいけにえのために雄やぎ二頭、全焼のいけにえとして雄羊一頭を用意する」 5節

さてそれから、アロンはイスラエル全会衆の罪のいけにえとして、今度は自分以外のイスラエルのすべての人々の罪を赦していただくために2頭のやぎを用意し、全焼のいけにえのために雄羊1頭を用意するのです。このことは5節の中に出て来ます。

④ 「アロンは自分と自分の家族の贖いのために雄牛を捧げる」 11節(6節)

こういった準備が終わった後で、アロンは自分と自分の家族の罪の贖いのために雄牛を主に捧げるのです。つまり雄牛を殺して自分たちの罪の赦しを請うわけです。11節、また6節にも出て来ます。

⑤ 「至聖所の中に香を持って入る」 12-13節

それが終わったら、アロンは至聖所の中に入って行くのです。聖所の中でも最もきよいところとされ、大祭司が年に一回だけ入ることが許されている場所です。その時に香炉を持って入って行きます。余りにもきよいところゆえに正面からずかずか入って行かない。からだを横に向けて入り、そこを去る時も、主に背中を見せないように後ずさりして出て行くことと記されています。非常に恐れをいだきながら主の前に立ち、まずその香炉を贖いのふたの上に置きます。置いた後大祭司はそこから出て来ます。

⑥ 「自分と家族の罪のために捧げた雄牛の血をもって至聖所に再び入り、贖いのふたに、またその前に血を振りかけ、祭壇の周りの角にも塗る」 14節(18節)

そしてその上で、アロンは自分自身と家族のために捧げた雄牛の血を持ってまた至聖所の中に入ります。そして、贖いのふたの前に、その上に血を振りかけ、祭壇の角にもその血を塗ると記されています。14節の中に出て来ます。

⑦ 「アロンは、二頭のやぎのうちで、「主のため」と書かれたくじが当たった方が殺され、その血を持ってアロンは再び至聖所に入る。そして、やぎの血を贖いのふたの上と前に振りかけ、祭壇の周りの角にも塗る」 15節(7-9、18節)

自分たちの罪の贖いがなされた後、アロンは2頭のやぎを前にしてくじを引かせます。「主のために」と書かれたくじともう一つのくじは「アザゼル」と書いてあります。そしてこの「主のために」と書いたくじが当たったやぎを殺して、アロンはその血を持って再び至聖所の中に入って行くのです。ですから彼はまず最初に香を持って入り、そしてその後自分と家族の罪を赦していただくために雄牛の血を持って入り、そして三回目にイスラエルのすべての人々の罪を赦していただくためにやぎの血を持ってそこに入って行くわけです。同じようにやぎの血を贖いのふたの上と前に振りかけ、祭壇の周りの角にも塗ることが15節、また7-9節、18節にも出て来ます。

⑧ 「『アザゼル』と書かれたくじが当たった方のやぎは、アロンがその頭に両手を置き、イスラエル人のすべての罪を告白した後で、荒野に放つ」 21節

その後、アロンは「アザゼル」と書かれたくじが当たったもう1頭のやぎの頭の上に両手を置いて、イ

イスラエルのすべての人々の罪を告白した上で、そのやぎを荒野へ放ちます。絶対戻って来ないように、放つ係の人は谷底からそのやぎを落とすと言われていました。つまりそれは罪が赦されることを象徴するのです。

これがこのレビ記16章の中に出て来る贖罪の日、イスラエルの人々にとって最も大切な日に行なったことであり、神殿や幕屋がある間は彼らはそれを行ない続けていました。この役目をそれぞれが無事に終えた時、人々は自分の罪が赦されたということを確認するわけです。ただここには問題がありました。彼らは毎年このようなことを行なう必要があったのです。

B. キリストの救いが完全な救いをもたらす証拠

そこで、きょうのテキストに戻って、このヘブル人への手紙の著者は、この贖罪の日の不完全さとキリストによる完全な救いとを対比するのです。動物のいけにえでは完全な赦し、永遠の赦しを得ることはないと。しかしイエス・キリストのいけにえは一度で完全な救い、永遠の救いを私たち人間に備えてくれたことを彼は私たちに教えようとするわけです。この9章を見ると、イエス・キリストのいけにえには、イエス・キリストのなされた救いのみわがが我々に完全な永遠の救いをもたらす二つの証拠を彼は挙げてくれています。

1. 「キリストのいけにえの完全性」：Iペテロ1:18-19、ヘブル7:26-27

一つ目は、キリストのいけにえの完全性です。まず、捧げた大祭司が完全であっただけではなくて、捧げられたいけにえも完全であったということです。

贖罪の日の大祭司と大祭司イエスを比較するのです。大祭司はイスラエルの民の罪の赦しを請う前に自分自身と自分の家族の罪の赦しを求めなければならなかった。主イエス・キリストはその必要がなかったということです。本来なら大祭司はまず自分の罪を赦してもらう必要があったのです。しかしイエス・キリストに関して言うならば、大祭司イエスは自分の罪を赦していただく必要がなかったのです。なぜかという、イエスのうちに罪がなかったからです。この方のうちに罪がないから、この方がこの世にお見えになった目的を果たすことがお出来になるのです。26節の一番最後「今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」とあります。主イエス・キリストがこの世に人としてお生まれになったのは「罪を取り除くため」だと。「罪を取り除く」というのは罪を完全に洗いよめるとか、その罪悪感からの解放も指すのです。ということは主イエス・キリストが人としてこの世にお見えになり、ただ一度ご自身をいけにえとして十字架に架かってくださり、死んでくださったと。イエスがご自身をいけにえとして捧げてくださったあの十字架によって、信じるすべての人の罪が取り除かれると。あの十字架は信じるすべての人の、あなたのすべての罪を完全に洗いよめる力を持ったものだとして教えてくれています。それはこの方のうちに罪がなかったから可能だったのです。

またもう一つおもしろいことばが出て来ます。28節「キリストも、多くの人の罪を負うため」と「負う」ということばが出ています。「負う」ということばは「支払う」とか「いけにえとしてだれ(何)かを捧げる」という意味があります。ということは、この28節が私たちに教えてくれているのは、主イエス・キリストの十字架はあなたの罪があなたに要求していた代価を彼が払ってくれたということです。罪を犯した私たちに要求されたものは死です。肉体的な死もそうだし、永遠の死もそうです。27節が教えるように、罪を犯したものは必ずさばきを受けるのです。主イエス・キリストがああ十字架でああなたが支払わなければならないあなたの罪の代価をあなたに代わって全部払ってくれたと言うのです。あのイエス・キリストの十字架の死はあなたが払うべき代価そのものだった。イエス様はそれを代わって払ってくださった。そのことを教えているのです。

ペテロもそのことについてこう言っています。「ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」(Iペテロ1:18-19)、罪のないイエス・キリストの血潮によって、この代価によって、あなたも私もその罪から救い出されたと。

ですからイエス・キリストはあの十字架でどのような罪でも赦されるに余りある代価を支払ってくださった。それが証拠に、イエス様が十字架にお架かりになった時に、ふたりの強盗が彼と一緒に十字架に架かっていました。中途半端な犯罪人ではなかったのです。十字架に価するほど大変重い罪を犯した者たちです。その中のひとりがイエス様にこう言います。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」(ルカ23:43)と。イエス様は「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と言われます。あの十字架にはりつけにされるほどの大きな罪人であっても主は赦してくださった。イエス・キリストの十字架はどんな罪でも赦す力を持っているのです。なぜならこの方のうちには罪がなかった。ゆえに彼は自分の罪を贖うためにいけにえを捧げる必要がなかったのです。そういうお方だからご自分をいけにえとして捧げることによって、だれもなし得ることのできなかつた完全な救いをなし得てくださった。

まさにそのことがヘブル7:26に「また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。」と、この著者が教えています。私たちに必要な大祭司というのは、自分の罪を贖わなければならないような人間の大祭司ではなく、そんな必要のない大祭司だと。きよく、悪も汚れもない、「天よりも高くされた大祭司」と。27節に「ほかの大祭司たちとは違い、キリストには、まず自分の罪のために、その次に、民の罪のために毎日いけにえをささげる必要はありません。というのは、キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。」とあります。この著者は、これまで大祭司たちが行ってきた罪の贖いとイエス・キリストによってなされた贖いを比較するわけです。人間の大祭司が行ってきた贖いというのは毎年毎年繰り返さなければいけなかった。しかしイエス・キリストによる贖いというのはただ一回きりでそれを成し遂げたと。だからキリストによって備えられる救いは完全なのです。なぜなら完全ないけにえが捧げられたからです。

2. 「キリストのみわざの完全性」

二つ目に私たちがこの9章の中で見ておきたいことは、キリストのいけにえだけが完全だったのではないのです。キリストのみわざの完全性です。

1) 人間に定まっていること 27節

我々はそれを見て行くのですが、27節に人間に定まっている二つのことが書かれています。「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」と、二つのことが決まっているという話です。

- ・ 「一度死ぬこと」
- ・ 「死後にさばきを受けること」

ではこの死後のさばきを受けた後どうなるかと言うと、その後その人には永遠の地獄が待っているという話です。これを「第二の死」と呼んでいます。黙示録20:13-15に「人々はおのの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」と。ここで教えていることは、「いのちの書に名のしるされていない」人は一度死んだ後、その後よみがえってさばきを受け、そして「火の池に投げ込まれ」という話です。彼らは「第二の死」を経験するという事です。永遠の地獄に彼らが至るということです。我々は生まれながらにみんなこの運命をたどって来たのです。ですから「定まっている」と書かれています。これはそこに「蓄えられている」とか、「貯蔵されている」とか、「待っている」とか、また「予約されている」という意味があります。つまりだれもここで「定まっている」ことを変えることも、この「定まっている」ことを逃避することもできないということです。必ずこれらのことがすべての人間に起こるのだということです。

それを話した上で、このヘブル書の著者は人間に定まっていることとイエス・キリストとを対比しています。27節にはすべての人間は「一度死ぬ」と書いてあります。28節に「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられました」、つまり死んだという話です。十字架で亡くなったことです。我々人間はみんな肉体的な死を経験する。確かにイエス様も私たちとは違いましたけれども、ご自分が進んで十字架に架かって十字架で死んでくださった。彼は私たちと同じ人でもあったのです。27節「一度死ぬことと死後にさばきを受けることが」とあります。これがすべての人間に定まっていることであると。

イエス様は確かに一度死なれたのです。でもその後にさばきを受けるとは書かれていません。なぜかという、イエス・キリストのあの十字架の死が人間が避けて通ることのできない、このさばきというものに解決をもたらしたからです。もしイエス様が十字架にお架かりになっておられないとしたら、我々人間はこの運命どおりに生まれて死んでさばきを受けて地獄に行く、それが一番ふさわしい存在です。なぜなら私たちは神に逆らい続けて来たのです。しかし、イエス・キリストは私たちと同じように十字架で死なれました。しかしこの死が違ったのです。このイエス・キリストの死には人間の運命を変えるだけの力があつたのです。我々の永遠の進路を変えるだけの力を持っていた。我々人間には選択肢がなく、みんな永遠の滅びに向かっていたのです。ところがイエス・キリストの十字架によって、その永遠の滅びから救い出され、私たちはこの方とともに永遠を過ごす、そのような祝福の中に招かれる可能性がここに起こったのです。全部イエス・キリストの十字架ゆえなのです。

人はすべて死ぬ、だからイエス様も死んだ。すべての人は死んだ後さばきを受ける、でもイエスはさばきに遭わない。なぜならこの死がさばきからの救いを用意してくれたからです。完全な救いです。主イエス・キリストが用意された救いはまさに完全なものです。ですから私たちをその罪のさばきから救い出してくれる。我々人間がどうすることもできなかったさばきに対する解決を、さばきに対する救いをもたらすものであると、そのようにこのヘブル書の著者は我々に教えるのです。

世の中の数ある宗教では救うことはできません。どんな宗教を見ても、そこに十字架は存在しません。

そこに存在する立派な教祖たちは、イスラエルの大祭司と同じです。彼ら自身の罪の赦しをもらわなければいけない存在なのです。ところがイエスだけは罪のないお方だったから罪の赦しをもらう必要がなかったのです。だからこの方の死にはこれだけの力があつたのです。

2) 主のなされたみわざ

主イエス・キリストが私たちのためになしてくださったみわざが三つ出て来ます。

(1) 「罪を取り除くために来られた」 26節 (一度目の来臨。初臨。)

26節「しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」と。イエスの一回目の来臨、初臨の話です。イエスが人としてこの世にお見えになった時の話です。さっきからお話ししているように、この世に人としてお見えになり、十字架に架かることによって完全な罪の赦しを備えてくださった。だから、二度目にイエス様が来られる時には同じ目的では来ないということです。なぜなら、罪の赦しをもたらすという目的は一回の十字架で完了したからです。人間の祭司は毎年いけにえを捧げなければいけなかった。このいけにえは完全に、永遠に罪を除くことができなかつたからです。しかし、イエス・キリストのいけにえは完全に永遠に信じる人の罪をその人から除くのです。ですから、二回目に同じ目的を持ってこの世に来る必要はなかつたのです。救いはあの十字架によって完了したからです。

(2) 「私たちのために神の御前に現れてくださる」 24節

二つ目に、24節「キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所にはいられたのではなく、天そのものにはいられたのです。そして、今、私たちのために神の御前に現われてくださるのです。」、これは、イエス・キリストはとりなしの祈りをしてきているという話です。ヘブル7:25を見ると、「したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」と記されています。この著者は私たちに教えてくれます。イエス様がこの世にお見えになり、十字架で完全な救いを成し遂げてくださった。そしてその三日後によみがえり、40日この地上にいて肉体を持ってよみがえったことを明らかにし、天に凱旋された後、イエス様はあなたや私のために祈り続けてくださっていると。このような神なのです。このような救い主なのです。だからこの方が備えられた救いは完全なのです。ちゃんとアフターケアまで整っている。私たちを決して見捨てることなく、いつも我々のために主はそうして祈ってくださっている。

(3) 「彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られる」 28節 (再臨)

そして三つ目に、28節「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」とあります。イエス様が早く帰って来てほしい、そのように待ち望んでいるクリスチャンたちの救いのために来る。私たちをこの罪のからだから解放してくださるのです。私たちに栄光のからだを与えてくださるのです。だって我々はそれを待っているではないですか。私たちは今のこの大変な世の中から解放されたい、そういう願いを持ってキリストの再臨を待っているではありません。あなたも私も神が今この地上に置いてくださっている。この地上において神の栄光を現わすために必要な恵みは神様はちゃんと備えてくださっている。大変な苦しみを経験しているならば、私たちに必要なのは主を信頼して行くことです。神様が私たちに約束されていることは我々がこの地上にあって神の栄光を現わすために必要な恵みはもう十分に備えられているということです。その神様の恵みをいただきながら、しっかりと主の栄光を現わし続けることです。

私たちがイエス様に早くお会いしたいと、イエス様に早く帰って来てほしいと願っているのは、この困難からの解放のためではない。この罪のからだからの解放のためです。なぜなら我々クリスチャンに共通していることは、早くこの罪のからだから解放されたいと願っていることです。なぜか——。イエス様を悲しませたくないからです。神様を傷つけたくないからです。罪を持っている以上、私たちは神を悲しませることの連続です。だから我々は早く栄光のからだをいただきたい。主よ、早く戻って来てくださいますとその日を待っているのです。そして必ずその日が来ると約束されているのです。この罪のからだを脱ぎ捨てて、栄光のからだを着る日が来ます。そして我々は主とともに永遠を過ごすのです。

人はみんな死ぬとみことばは言いました。確かにそうです。しかしある人は二度死にます。なぜ彼らが二度死ぬのか——。それは彼らが救いに与っていないからです。この主イエス・キリストの救いを拒んだ者たちは、死を迎えた後、その罪のさばきを、つまり第二の死を待つしかありません。しかし、救いに与った私たちはこの第二の死が私たちを襲うことはありません。なぜならもうさばきが完全に、永遠に取り除かれたからです。だから私たちは早くこの方にお会いしたいと、その日を待ち焦がれている。イエス様が黙示録22:12で「見よ。わたしはすぐに来る。」と約束された。イエス様はあなたや私をご自分のもとに迎えてくださるために帰って来られます。

最後に、このことを考えてください。多くの信仰者たちは早くイエス様にお会いしたいと思っ

た。そしてその備えをもって、与えられた日々を生きていました。我々はどうでしょう？あなたは本当にきょうイエス様にお会いしたいという思いを持って生きておられますか？それとも「イエス様、もう少し時間を下さい」と、「まだやりたいことがたくさんあります」、「したいことが山ほどあるのもうちよっと待ってください」と。信仰の勇者たちはそんなふうには生きていません。彼らはイエス様にお会いすることを待ち望みながら、「きょうがこの地上における最後の日かもしれない。」と与えられた日を生きていました。皆さん、イエス様にお会いすることを楽しみにしておられますか？みこころならぜひきょう主にお会いしたいと、そのことを望みながら生きておられますか？希望をいただいた我々ひとりひとり、それにふさわしく生きることです。この地上のことを見て、いろいろなことで思い煩うのではなくて、私たちが見るべきところは主にお会いするそのすばらしい将来です。主と過ごすその永遠です。それを見てきょうを生きなさいと。希望をいただいた皆さん、それにふさわしく生きて行きましょう。我々にはすばらしい希望が主によって約束された。世の中の人たちはそれを持っていません。罪の赦しがあることを我々は示さなければいけない。それを求めるならば、あのイエス・キリストの十字架が完全に、永遠にすべての罪を赦してくださいと。救い主がおられること、救いがあることを伝えることです。そうして歩んで行くならば、「主よ、早く帰って来てください」、それが間違いなく私たちの願いになるはずで、その願いを持ってぜひ歩んでください。

《考えましょう》

1. 我々クリスチャンの希望とは何でしょう？
2. 人間に定まっていることは何でしょう？
3. どうしてそれらから逃れることが人間にはできないのでしょうか？
4. 主がきょうあなたに教えられた真理をあなたはどのように今週の生活に適用しますか？あなたの決心をあなたの信仰の友と分かち合い、祈りをもって励まし合ってください。